

## 李賀という詩人像

——李商隱「李賀小伝」と李賀の物語——

和田英信

### はじめに

詩や詩人はどのようなものとしてとらえられてきたのだろうか。

数え切れないほど多くの詩人たちのなかにあつて、小論でとりあげる李賀の場合は、かなり突出した存在であつたといえるかも知れない。まずは彼の詩そのものが、他の詩人にくらべて異色あるものであつた。

詩が言語表現であるかぎり、それは詩人の属する文化圏の言語の体系に基づいて表出される記号のひとつにほかならない。そして詩を作り出しそれを享受する枠組みが確固とした範疇と強固な芯をもち歴史的な変化に乏しかつた点にこそ、中国古典文学の大きな特質があつた。

そうした文学環境にあつて、李賀の詩はその枠組みからの完全な逸脱であるとはいえないまでも、中心からの少なからぬ偏差によつて、肯定的にも否定的にも大きな振幅をともなつて評価されてきた（——もし完全に逸脱すれば、それは「ナンセンス」の領域に足を踏み入れることになる。ただ、「ナンセンス」もまた或る種の表現たりうるし、李賀と同時代、中唐にはそうした表現の志向の痕跡を見いだすことができる<sup>(1)</sup>）。

ただここで触れたいのは、そうした李賀の作品そのものではなく、数々の伝説によつて形作られた李賀の「詩人」像についてである。李賀の詩がその独自の詩風に着目されてきたのと呼応するかのよう<sup>二</sup>に、李賀の伝記もまた起伏に富んだ数々の物語によつて彩られている。

唐の皇帝の血筋をひくという家系と自負。幼少時より詩を能くしたという早熟の才。高名な文人による評価と名声。ときにみせる高慢なふるまい。科擧受験の道が閉ざされるとい<sup>三</sup>う挫折。故園での詩作への没頭。二十七（あるいは二十四）才という夭折。そして異常な臨終の光景……。

むろん虚実とりまぜてとはいへ、およそこれほどまでに印象鮮やかな物語を、李賀以外の詩人に求めることはできないであろう。右に李賀を突出した存在と称した所以である。

小論は、こうした李賀像、あるいは李賀の物語の考察を通して、近代以前の中国における「詩人」観の一端を探つてみようと思う。

## 【一】李商隱「李賀小伝」

李賀（字は長吉、七九〇？〜八一六？）に関する言及・記事等のうち、ある程度まとまった伝記的事項を伝え、成立年代が最も早いものは、李商隱（八一二〜八五八）の「李賀小伝」（以下、「小伝」と略称）と思われる。杜牧（八〇三〜八五二）の「李賀集序」は、文中の記述から大和五（八三一）年に成つたことが知られるが、李賀に関する伝記的な内容はほとんど含まない。

李賀の物語を見る際、「小伝」は最も重要な意義を有しており、小論の考察もまた「小伝」を主たる対象とする。本節ではすこしづつ区切りながら読んでゆきたいと思う。

京兆の杜牧は「李長吉集序」を書き、長吉の文学の他者と異なるすぐれた点を述べ尽くして、世に伝わっている。いっぽう長吉の事跡については、彼の姉で王氏に嫁いだ人が、もつとも詳細に語ってくれている。長吉は痩せてほっそりとした体つき、両眉がつながり、爪を長く伸ばしていた。吟詠に沈潜し素早く書くことができた。

京兆杜牧為李長吉集序、状長吉之奇甚尽、世伝之。長吉姉嫁王氏者、語長吉之事尤備。長吉細瘦、通眉、長指爪。能苦吟疾書。

はじめに「長吉之奇」と「長吉之事」が対比されている。李賀集の序を執筆した杜牧につき、李賀の文学の「奇」を述べるに人を得たことをまず記し、これと対置することによって、李賀その人の身近にあった姉が李賀の「事」を語るにふさわしい特別な存在であることを強調する。

また冒頭において、「小伝」の記述が李賀の姉の情報に由来することを述べるのは、記事の信憑性を読者にむけて確認するとともに、以下に語られる李賀の姿が彼の身近にあった一人の女性の視点によって「内」側から捉えられたものであることを予め示すものである。すなわち「外」における社会的な存在としての李賀ではなく、それとは異なる別の一面の李賀を伝えることを意識した「小伝」の記述姿勢の表明にもなっているだろう。

続く記述は李賀の容貌について。「細瘦、通眉、長指爪」は「能疾書」と同様、李賀を直接に知る人からの情報にふさわしいリアリティを帯びる。同時にまた容貌の記載は、それが記載に値するだけの特別なものであったことを示す。常と異なる身体的特徴は、「異人」あるいは「神仙」の相として、『列仙伝』、『神仙伝』などにしばしば記載される場所である。たとえば「陽都女」という女仙について、「生まれつき異相の持ち主で、眉が連なり耳が細長く、ひとびとはこれを不思議がり、天人かと疑った（生有異相、眉連、耳細長、衆以為異、疑其天人也）」

と〔列仙伝〕巻下「犢子」、〔太平広記〕巻六〇「陽都女」出「墉城集仙録」。「長指爪」もまた麻姑の「鳥爪」を想起させる〔太平広記〕巻六〇。身体的特徴はそれが生来のものであるだけに、「聖痕」としての宿命と神秘のイメージを当該人物に付与する。これは臨終における特異なできごとと呼応するものであろうか。<sup>(4)</sup>

まず最初に韓愈の知遇を得た。交際のあつた者のなかでは、王参元、楊敬之、権瓊、崔植と仲がよかつた。毎朝、日の出とともに諸公と出かけた。未だ嘗て詩題を予め設けてから、他の人のように無理にそれに合わせ、きまりに則ることを気にかけて詩を作るといふことはなかつた。つね日ごろ、奴僕をつれてラバに乗り、古びてほつれた絹の袋を背に出かけた。そして詩興が湧けばそれを書き付け袋の中に投げ入れる。夕暮れ帰宅すると、太夫人（母親）は下女に言いつけて袋を受け取り中から書き付けを出させる。その多さを見るにつけいった、「この子はきつと心を吐き尽くすまで詩を作ることをやめないでしょう」と。灯をともし食事をとり終えると、長吉は下女から書き付けを受け取る。そして墨を磨り紙を用意し、手を加えて完成させ、他の袋に入れる。酒に酔つたとき、或いは弔葬の日でないかぎりはおおむねこうであつた。時間をおいてから手を加えるといふことはしない。王参元・楊敬之らが時に訪れ、探し出して書き写してゆく。長吉はしばしば一人で馬に乗り、京師や洛陽に出かけた。そして時に出先で詩を作つても、そのままその場に書き捨ててくる。それ故、沈子明の家に残されていた詩は僅か四巻であつた。

最先為昌黎韓愈所知。所与遊者、王参元、楊敬之、権瓊、崔植為密。毎旦日出、与諸公遊、未嘗得題然後為詩、如他人思量牽合、以及程限為意。恒從小奚奴、騎距驢、背一古破錦囊、遇有所得、即書投囊中。及暮歸、太夫人使婢受囊、出之。見所書多、輒曰、「是兒要当嘔出心始已耳」。上灯与食、長吉從婢取書、研墨置紙足成之、投他囊中。非大醉及弔葬日、率如此。過亦不復省。王楊輩、時復來採取写去。長吉往往獨騎往還京洛、所至或時有著、隨棄之。故沈子明家所余四卷而已。

ついで李賀の交友関係と詩作について。韓愈と李賀の関係については、韓愈自身による「諱弁」によつても確

かに知られる。ただ「小伝」は、諱の事件については触れない。あくまでも姉の「内」なる視点の故か。或いは、世に広く知られていることは重ねて述べないという「小伝」の記述姿勢か。

友人として名をあげるのは、王参元・楊敬之・権璩・崔植の四人。このうち王参元は、馮浩「詳注」によれば李商隱の舅、王茂元の弟であり、李賀の姉が嫁いだ王氏というのがとりなおさずこの王参元であろうという。錢仲聯もまたその可能性を支持する。<sup>5)</sup>以下、小論の目的に鑑みて、事実関係に関する考証には深入りしない。ただ、右が事実であるとすれば、「小伝」の筆者李商隱の李賀に寄せる特別な思いの背景、その幾ばくかが想像されるように思う。

つづいて李賀の詩作営為の特質を日常生活の中に写す。それを一言でいえば、世間一般、他者のそれとの相違。「小伝」の冒頭、筆者李商隱は、李賀の文学の特質を「奇」の一語をもって総括していた。そもそも「奇」の原義は、他と異なっていること。<sup>6)</sup>

「未だ嘗て題を得て然る後に詩を為らず、……」——課題にそつた詩作の否定、詩作の規律からの逸脱。これらは、今に残る李賀の実作品からも確かめることができる。李賀の作品の多くは樂府および古体詩であり、音数律・平仄律などの細かな規約に束縛された近体詩の作例は数少ない。このことは当時の詩人としてはきわめて異例のことであった。<sup>7)</sup>

同時にこの記述は、李賀の詩作のもう一つの特色を語っている。それは、詩作営為の結果ではなく、詩の言葉をつづる、その時、その場での営みそのものが、李賀にとって意味あることであったこと。「至る所にて或いは時に著すこと有るも、随いて之を棄つ」——出来上がった作品に対する無頓着さもまた、詩を作る行為のみが李賀の目的であったことを示している。

「古く破れたる錦囊を背にし、偶たま得る所有れば、即ち書して囊中に投ず」——詩興の湧くままに言葉をつむぎ、その折々の言葉をつづりあわせたものとしての作品。あたかも読書行為によって喚起される作者のイメージが、ここに描かれる李賀像に投影されているかのように、「小伝」にみえる李賀の詩作のあり方と、われわれが彼の詩を読む際に受ける印象との間には通じ合うものがある。詩編全体の統一性や論理的脈略に欠ける感がある一方、部分部分の表現に見いだされる詩の言葉としての密度の高さは、李賀詩の大きな特徴といつてよいだろう。

この一節でいまひとつ見落とせないのが、印象的な母親の姿。「この児、要<sup>まさ</sup>当に心を嘔き出して始めて已むべきのみ」——子の詩作の本質をとらえ、そのいのちのあり方を予め見通すような言葉。短い言葉のなかに、李賀の文学に対する理解、詩人の生を生きる我が子への慈しみと嘆きが集約され、主人公の母親の姿を鮮やかに浮かび上がらせる。

長吉が亡くなる直前、白昼ひとりの緋い衣服の人が現れた。赤いみずちにのり、一枚の木ふだをもち、その書体は太古の篆文あるいは隕石の文様にも思われた。そしていうには、「長吉を召しにきた」と。長吉は読むことができず、にわかに寝台から下りると叩頭し、「お母ちゃんは年老い病んでいます。わたしは行きたくはありません」と。緋衣の人は笑みを浮かべながら「帝は白玉楼をお建てになった。君を召して記を作らせようとの思し召しだ。天上界はおよそ楽しいところで苦しくはない」。長吉はひとり泣き、それを周りの人々はみな見ていた。しばらくすると、長吉は気絶した。居所の窓の向こうからもくもくともやが立ちこめ、車鈴管弦の音が聞こえてきた。太夫人はすぐさま周りの人の哭声を制した。五斗の黍が炊き上がるほどの時間が経過し、長吉は亡くなった。王氏に嫁いだ姉は、長吉について話を作り上げるような人ではない。本当に見たところである。

長吉將死時、忽昼見一緋衣人、駕赤虬、持一版、書若太古篆或霹靂石文者、云「当召長吉」。長吉了不能読、歎下榻叩頭、言

「阿嬰老且病、賀不願去」。緋衣人笑曰、「帝成白玉樓、立召君為記、天上差樂、不苦也」。長吉泣、辺人尽見之。少之、長吉氣絶。常所居窗中、教教有煙氣、聞行車嚙管之聲。太夫人急止人哭、待之、如炊五斗黍許時、長吉竟死。王氏姉非能造作謂長吉者、實所見如此。

臨終のエピソード。病床に臥す李賀のもと、天帝からの使者が訪れ、天の書記として白玉樓の記を作るようその命を伝える。

李賀の作品に現実を超えた世界に対する嗜好が多く見られることは、あらためて言うまでもない。ここではその作者、李賀自らが、彼の作品世界を髣髴とさせる空間の登場人物として姿を書き込まれる。

「事」はたしかに怪異に渉るものではあるが、記述はむしろ過剰なまでに具体的である。「緋衣」「赤虬」などの色彩語、使者の手にする版に書かれた奇怪な文字、使者と李賀のやりとり、そして「行車嚙管之聲」など、視覚・聴覚の両面から、ディテール細やかに描かれる。現実を超えた世界を描くとき、色彩をはじめとする濃厚な感覚イメージを多用すること、これもまた李賀詩の特徴のひとつであった。

書記としての仙界への転生。このことは、李賀の早すぎる死の、そして同時にまた、詩人として生きたその生の、「解釈」と見なすことができるであろう。生まれながらにしてあらかじめ決められていたかのように、「小伝」における李賀は、異界の存在としてのしるしを持っていた。しかし「解釈」への安易な還元を拒む、「事」の生々しい手触りをも、「小伝」は伝える。李賀は、すぐにはその命を受け入れない。笑みを浮かべる「緋衣」の使者と涙を流す李賀。李賀は地に頭をつけ告げる。「阿嬰老且病、賀去るを願わず」——前段での母親の言葉がそうであったように、ここでは李賀の母親を氣遣う言葉が印象深い。「阿嬰」という母を指す語、おそらくは口語を写したと思われるこの語が、母と子の関係、その時、その場の状況をまざまざと再現する。一方見守る母は

無言のまま、抑制された行動が短く挿入され、語られぬ思いがかえって強く喚起される。母と子と、各々ただひとつづつ選び取られた言葉が、テキストの二個所に分けて記載され、それが互いに響き合う。

出来事の報告を結ぶにあたって、あらためて王氏に嫁いだ姉の実見に基づくことを記し、「事実」であることを強調する。「事実」の強調は、「事」の怪異に対する筆者の自覚に由来するだろう。同時に、そのうえで敢えて書き記したところに、「小伝」の記述にしめるこの一段の重さが了解される。

ああ、蒼々として高き天、その上に果たして天帝はいますのか。天帝もまた、苑囿・宮殿・樓閣を構え、楽しまれるのか。もしそうならば、高く遙かな天、尊くかき天帝のもと、この世に優る文才の持ち主はきつといるはずではないか。なぜひとり長吉に目をかけられ、その命を奪われたのか。ああ。それとも才ありて他に勝れた者は、この世のみならず天上においても少ないのか。長吉の生は二十四年。位階は奉礼太常中にとどまる。当時の人は長吉を妬み、しばしば排斥した。才ありて他に勝れる者は、天帝のみがこれを重んじ、世の人はかえって重んじないのか。それともまた、この世の人の見識が上帝にまさるといえるのか。

嗚呼、天蒼蒼而高也、上果有帝耶。帝果有苑囿宮室觀閣之玩耶。苟信然、則天之高曠、帝之尊嚴、亦宜有人物文彩愈此世者、何独番番於長吉、而使其不寿耶。噫、又豈世所謂才而奇者、不独地上少耶。天上亦不多耶。長吉生二十四年、位不過奉礼太常中、當時人亦多排擯毀斥之。又豈才而奇者、帝独重之、人反不重耶。又豈人見會勝帝耶。

最後は、筆者李商隱の慨嘆。ここでは「地上」と「天上」を対比し、李賀の短い生の意味を問いつつ、その才をたたえ、それを受け入れることのできなかつた現実を嘆く。



## 【二】「小伝」以降

テキストの成立年代としてみた場合、李商隱「小伝」には若干遅れるものの、李賀に関する記事・話柄は、様々な文献に見いだすことができる。本節ではその主なものをみておく（以下、大意と原文を掲げる）。

（一）李賀は唐の諸王の子孫。七才のときから楽府で名を知られた。評判を聞いて訪ねてきた韓愈と皇甫湜の目の前で、瞬く間に「高軒過」の一篇を書き上げ、二人を驚嘆させた。進士科受験の際、家諱を冒すものとして非難され、韓愈は「諱弁」を著し弁護したが、登第しないまま若くして亡くなる。

李賀字長吉、唐諸王孫也。父璿肅、邕上從事。賀年七歲、以長短之歌、名動京師。時韓愈與皇甫湜覽賀所業、奇之、而未知其人。因相謂曰、「若是古人、吾曹不知者、若是今人、豈有不知之理」。會有以璿肅行止言者。二公因連騎造門、請其子。既而總角荷衣而出。二公不之信。因面試一篇、賀承命欣然、操觚染翰、傍若無人、仍目曰「高軒過」曰「……」。二公大驚、遂以所乘馬、命連轡而還所居、親為束髮。年未弱冠、丁內艱。他日舉進士、或謗賀不避家諱、文公時著「諱弁」一篇、不幸未壯室而終。（『太平広記』卷二〇二、出「摭言」<sup>8</sup>）

（二）元和年間、韓愈の引き立てで評価を高めていた李賀のもとへ元稹が面会を求めて訪れたが、明経出身ふぜいに会う必要は無いと追り返した。元稹はのちに礼部郎中になった際、諱の件をとりあげ、李賀の進士応募を妨害した。韓愈はその才を惜しみ「諱弁録」を著したが、李賀の軽薄なふるまいもあり、うまくいかなかった。

元和中、進士李賀善為歌篇、韓愈深所知重、於縉紳間每為延譽、由此聲華籍甚。時元稹年少、以明経擢第一、攻篇什、常交結於賀。一日執贄造門、賀覽刺不容遽入、僕者謂曰、「名経及第、何事来看李賀」。稹無復致情、慙憤而退。其後日左拾遺制

策登科、日当要路、及為礼部郎中、因議賀祖諱「晋」、不合忌舉。賀亦以輕薄為時輩所排、遂致輶軻。韓愈惜其才、為著諱弁録明之、然竟不成名。〔太平広記〕卷二六五、出『劇談録』

〔3〕李賀は唐の鄭王の子孫。幼くして文学の才能を發揮し、樂府の華麗な表現で並びなき名声を得た。父の名が「晋肅」であつたため進士受験がかなわず、二十四才、太常官に卒した。子を亡くして悲しみに沈む李賀の母親のもと、或る夜の夢に李賀が現れ、天帝の命で神仙に生まれ変わり、文学の官として楽しい日々を過ごしていると告げる。母の悲しみはこれよりやわらいだ。

隴西李賀、字長吉、唐鄭王之孫。稚而能文、尤善樂府詞句。意新語麗、當時工於詞者、莫敢与賀齒、由是名聞天下。以父名晋肅、子故不得舉進士。卒於太常官、年二十四。其先夫人鄭氏、念其子深、及賀卒、夫人哀不自解。一夕夢賀來、如平生時、白夫人曰、「某幸得為夫人子、而夫人念某且深、故從小奉親命、能詩書、為文章。所以然者、非止求一位而自飾也、且欲求大門族、上報夫人恩。豈期一日死、不得奉晨夕之養、得非天哉。然某雖死、非死也、乃上帝命」。夫人訊其事。賀曰、「上帝、神仙之居也。近者遷都于月圃、構新宮、命曰『白瑤』。以某榮於詞、故召某与文士數輩、共為新宮記。帝又作凝虛殿、使某輩纂樂章。今為神仙中人、甚樂。願夫人無以為念」。既而告去。夫人寤、甚異其夢、自是哀少解。〔太平広記〕卷四九、出『宣室志』

右三篇は何れも唐末から五代に成立したと思われる筆記小説中の記事。周知のように、唐の中期以降、詩人たちの逸事・逸話、作品の生まれた経緯・背景を記した小説及び小説集が多く生み出されるようになる。こうした話柄に対する相当の需要が士人層の間にあつたこと、そしてこれをテキストに編み流通させる環境が備わつていたことがうかがえる。またこれらに特徴的なことは、しばしば類似した話柄が複数の著述に重なってみえることで、このことは、話柄がテキストとして記載される以前に口頭で語り伝えられる場の存在したこと、また記載さ

れたあとも書から書へと参照されながら伝承と変容を繰り返していった状況が想定される。

こうした記事の内容については、しばしばその真偽が問題とされてきたが、小論が関心を寄せるのは、事の真偽ではなく、物語を作り出し受容する枠組みとその意味である。

そこには当時の文学環境における詩人観、文学観、士人層の関心が反映されているだろう。たとえば、当時の人々にとって科挙は大きな関心事であったと思われるが、これら唐代小説中にはたしかに科挙にまつわる話柄が少なくない。〈1〉の『唐摭言』のように「専ら進士科名の事」を記す書も生み出されるに至った（『直齋書録解題』小説家類『唐摭言』）。

当時の新興士人層の中心人物のひとり韓愈の推輓を得て若くして頭角を現しながら、諱の事件によって挫折を余儀なくされた李賀に対する関心は、当然のことながら高かったと想像される。おそらくこの件は、事の当初より人々の関心を引き、さまざまに語りつがれながら最終的にいま目にしうる記事として、すなわち右に引いた諸記事をはじめとする李賀の逸話として残されたものなのであろう。

〈1〉〈3〉の三条は、何れも李賀が若くして楽府の作者として名声を得たことを述べる。また繁簡の差はあるものの、みな諱の件と科挙における挫折に触れる。諱の件は、李賀の人生においてはきわめて大きな意味をもつた事件であるが、このことについては韓愈（七六八〜八二四）の「諱弁」に見える。関連する箇所を次にあげておこう。

わたしは李賀に手紙をおくり、進士科を受験するように勧めた。李賀はその受験資格を獲得し、名を知られるようになった。すると、彼と評判を争う者たちは李賀を誹っていった、「李賀の父の名は晋肅、父の名を冒して進士を受験すべきではない

し、彼に受験を勧める者もまた同罪だ」と。この言葉を聞くものたちは、みな事実を正しく考察することもなく、声をひとつにして同調した。皇甫湜はいう、「はつきりと弁明しておかないと、あなたも李賀とともに罪を得ることになりますよ」と。わたしは答えた「わかった」と。……

愈与李賀書、勸賀挙進士。賀挙進士、有名。与賀争名者毀之、曰、「賀父名晋肃、賀不挙進士為是、勸之挙者為非」。聴者不察也、和而唱之、同然一辞。皇甫湜曰、「若不明白、子与賀且得罪」。愈曰「然」、……<sup>(1)</sup>

「諱弁」の右に引いた短い記述（——このあとの箇所）で韓愈は、諱について考証しつつ李賀の進士科応試の正当性を主張する）から得られる情報はきわめて限られている。まず韓愈の推薦によつて李賀の名が知られるようになったこと、またそのことを快く思わない人々が少なくなかったこと、そして科挙応試をきっかけに取り結ばれた韓愈と李賀の関係が、社会的な浮沈をともしにするような密接なものに見なされていたことなどである。それぞれの詳細については触れられていない。その曖昧に残された情報の隙間を埋めるように、物語が書き込まれてゆく。ことに〈1〉〈2〉の二条が「諱弁」によつて与えられた枠組みを参照しつつ物語を紡ぎだしていることははっきりと見て取ることができ。たとえば〈1〉『唐摭言』は、李賀が韓愈らに見出される経緯を語るものだが、このエピソードの登場人物、李賀、韓愈、皇甫湜は、そっくりそのまま「諱弁」に見える二人である。

〈2〉『劇談録』では、「諱弁」にみえた李賀の科挙受験の挫折を因果話に仕立てている。誰が何故、李賀の進士応試を阻んだのかは、「諱弁」には具体的に語られていないだけに、人々の好奇心を満たす逸話として巧みに構成されている。李賀の応挙を阻む敵役として元稹が登場するが、その動機を李賀の元稹に対する傲慢な言動の意趣返しとし、しかも「明経」と「進士」という科挙における科目の格差を道具立てとして織り込むなど、非常に手

が込んでいる。また登場する三人がいずれも当時の著名な文人だけに、ゴシップ種としての興味も引いたことであらう。<sup>(12)</sup>

いっぽう〈3〉は、「小伝」と同じく李賀昇仙のエピソードを語る。ここではとくに、子を喪った母親の悲しみ、その母を慰めるため夢に現れた子というように、母子の繋がりと一点に話題の重心が置かれ、いわゆる「孝子」譚としての色合いを帯びる。また李賀の臨終までを描いた「小伝」からみれば、その後の母と子、すなわち後日談という位置づけにあたる。「小伝」と大きく相違する点は、李賀の昇仙という異事が、ここでは李賀の死後、母親の見た夢のなかでの話として合理化されていること。また叙述のスタイルも「小伝」とは異なり、李賀のいささか説明的な科白に内容の伝達の多くを負っている。

### 【三】「李賀小伝」と李賀の物語

こうして見てきたとき、あらためて気づくことは、「小伝」と他の記事との書き方のちがいである。他の話柄がほぼ例外なく触れる情報、李賀の家系、若くして（或いは幼くして）得た楽府作者としての声価、諱の件と科挙受験の挫折など、李賀に関する基本的情報については、「小伝」はまったくといってよいほど触れない。

ただ「伝」のスタイルとしては他の諸記事の方が本来のものであって、「史伝」の叙述形式に準じて、家系・本籍にはじまり、諱、字、そして生涯の事跡を網羅的に綴るのが、伝記記事の一般的な様式といえる。この点からいえば、「小伝」の書き方はむしろ特殊と思われる。

その書き出し——「京兆の杜牧、李長吉集の序を為り、長吉の奇を状して甚だ尽くす。世に之を伝う。長吉の姉の王氏に嫁ぎし者、長吉の事を語りて尤も備わる」——がすでに、「伝」のそれとしては甚だ破格のものといえ

よう。「長吉」という字による呼称も、「伝」の記述者の記述対象に対する位置のとり方として、異例のものである。第一節において指摘したように、これは「小伝」の意識的な記述姿勢に基づくものと考えられる。姉の眼にとらえられた「内」側における李賀像というのは、実は姉の視線を借りることによって、李賀の生き方を「内」側からとらえ直そうとした、李商隠の試みにほかなるまい。

そして李賀を「内」側からとらえ直したとき、そこに描き出されたものは、先に見たとおり李賀における詩を作るという営みであった。李賀の文学の「奇」については杜牧の序に尽くされていると述べつつも、「小伝」の語る「事」とは、詩を作る李賀の姿を通して再現された李賀の文学の本質ではなかったか。

たとえば唐末の詩人、陸龜蒙が「小伝」に読みとつたものも、社会の枠からはみ出して詩を作り続ける詩人の姿であった。陸は「小伝」に描かれた李賀の詩人像によせて、窮乏のため溧陽の尉の任につきながら、職務を省みずに詩作にふけり、代役を雇うため俸給を減らされた孟郊のエピソードを綴る。さらに李賀、孟郊、そして李商隠の詩人としての人生に、表現者固有の運命の影を読みとる。<sup>(13)</sup> 陸龜蒙が見て取つたように、李賀を「内」からとらえる「小伝」の書き手は、そこに自らの姿を投影していたともいえるであろう。

自らもすぐれた表現者であった李商隠が「内」側から描いた「李賀小伝」と、士人層一般において「外」からとらえられた李賀像に基づく諸記事とのあいだに、その書き方、あるいはテクストのもつ喚起力において、質的な格差が認められることは否めない。しかし、再現された李賀像それ自体が、全く様相を異にしたり、相互に矛盾するわけではない。そこに見いだされるのは、いずれも他とかけ離れた才能の持ち主の、選ばれた者のみに許される生のありかたである。

先にみた「宣室志」が、李賀昇仙のエピソードを採り入れていたように、「小伝」の記述は、他の記事・逸話と互いに浸透しつつ、李賀の物語を紡いでゆく。そして『新唐書』の李賀伝の記述もまた、「早熟」のモチーフや「高軒過」のエピソードを取り込みつつ、多くを李商隱「小伝」に負うこととなる。<sup>15</sup>ただ「正史」において臨終におけるエピソードが削除されたのは、これが「外」の世界における理からあまりに逸脱していたためであろうか。しかしながら、李賀物語のさまざまなモチーフのなかでもとりわけ印象的なのが、この臨終のエピソードであろう。そしてまた、このエピソードと彼の「鬼詩」（——たとえば、「蘇小小墓」の、死後もなお墓中にあつて思ひ人を待ち続ける美女。「七夕」の、黄泉の女性との一年ぶりの逢瀬。「神絃曲」の、天上世界を跳びめぐる夢、シャーマンと神々との交感等々）とのあいだには誰もが近縁性を認めるであろう。

奇怪な世界への関心は六朝期の志怪小説以来、遠く清代の『聊齋志異』にいたるまで、中国の文人の意識の一定の部分を占めていたと思われるが、ここでふと気づくことは、右にみた李賀物語における李賀のあり方が、『聊齋志異』の男性主人公たちの姿と、おどろくほどの共通性を有していることである。

『聊齋』の男性主人公は何らかの意味で現世的（昼の世界の）「欠落」を負っている場合が多い。たとえばそれは、父親の早世であったり、本人の貧窮や痴鈍であったり、ときに性的不能であったりする。そしてしばしば父親の不在を補うべく母親が保護者として大きな存在感を示す。また男性主人公の「欠落」を慰藉・補償する存在として異界（夜の世界）の女性が現れる。物語は男性主人公の両世界の往還として、あるいはまた男性の「欠落」が埋め合わされる過程として進展する。

李賀における現世的「欠落」はいうまでもなく、科挙受験の挫折であろう。父親はその名が子に脱しがたい桎梏を課しながら、李賀の作品や周辺の資料等も含めて、総じて存在感が希薄である。一方、「李賀小伝」に描かれ

る母親の姿はきわめて印象的である。李賀の物語はある意味では母と子の物語として読みうるだろう。

では李賀の「欠落」を慰藉し補償するものは何であったかといえ、詩を作るといふ営み、或いは彼が生み出した作品とその作品世界に他なるまい。「李賀小伝」における李賀の詩作への没頭、そして書記としての天帝からの辟召は、李賀の物語の完結のためには是非とも書き込まねばならなかつたはずだ。

李賀の作品、李賀の伝記、李賀にまつわる様々なエピソードの伝承。これらすべてが緬い交ぜになつたかたちで、過去の読者たちは李賀の文学を享受してきた。早熟の天才、夭折した悲劇の詩人といった彼の伝記的側面は、それと彼の手になる非日常的な作品世界との連関を期待する読者たちの心性によつて裝飾が施され、一方、作品の方もまた彼の伝記との関わりの中に読まれることになる。そこにおいて李賀は、単なる歴史上の一詩人ではなく、読者たちの共同幻想のうちに語られる物語の主人公でもある。

物語を生み出す土壌というものを考えてみる。文化の枠組みといかえてもよい。李賀の物語、あるいは李賀の詩そのものさえも、ひとり李賀という作者が作り出したものではない。李賀の物語と聊齋の物語の暗合。右の現象もまたこのことを示しているだろう。

誤解のないように付け加えておくならば、李賀の物語（および李賀作品）と『聊齋志異』の両者のなかに、怪異への志向の共通性を指摘しようとするものではない。たとえば「昼」ではなく「夜」、「外」ではなく「内」、そして「男性」ではなく「女性」という、物語を生み出す枠組みの、時代を超える普遍性に目をとめておきたいのである。

いうまでもなく中国の伝統的な文学観は、「昼」「外」「男性」という系列の原理と、詩人という存在との一致を要求する。ただ、その理念が幸福な達成をみることはきわめて稀であつた。とくに中唐という時代は、儒家の正



統的な文学理念が声高に標榜される一方、詩を作るという営みと社会的な価値基準との齟齬・軋轢が強く意識された時期でもあった。そのなかにあつて李賀の突出は、規範的理念の系列からの反転の徹底であり、それはあたかも意識的な選択のあとをみるかのように鮮やかでさえある。そしてこうした視点からみたとき、一見、奇異にも突出しても見える李賀の姿は、古典中国という文化圏における表現者のありかたの、一面の典型性を映し出す陰画のようにも思われるのである。

注

- (1) 川合康三「奇——中唐における文学言語の規範の逸脱」(一九八〇年、東北大学『文学部研究年報』三〇号。のち川合『終南山の変容——中唐文学論集』、一九九九年、東京、研文出版、所収)
- (2) 「李賀小伝」の本文は、『樊南文集』(一九八八年、上海、上海古籍出版社)によつた。
- (3) 杜牧の序は、その前半に沈述師の依頼で序を執筆するに至つた経緯を記し、後半に李賀の文学の特質を述べる。荒井健『杜牧』(一九七四年、東京、筑摩書房)に詳細な考察がある。
- (4) なお李賀自らもこの身体的特徴については意識をし、詩のなかに描かれる自己の肖像に、しばしばこれを書き込む。「答巴童」詩に「巨鼻宜山褐、龐眉入苦吟」、また「高軒過」詩に「龐眉書客感秋蓬、誰知死草生華風」と。
- (5) 錢仲聯『夢苕盦專著二種』(一九八四年、北京、中国社会科学出版社)所収「李賀年譜會箋」
- (6) 川合前掲論文に、「奇」と李賀の文学に関する詳細な考察がみえる。
- (7) 川合前掲論文にも指摘がある。
- (8) 『太平広記』の本文は、一九六一年、北京、中華書局排印本による。『唐』摭言ならびに著者王定保については、『直齋書録解題』小説家類に、「摭言十五卷、唐王定保撰、專記進士科名事、定保、光化三年進士、為吳融子華婿、喪乱後入湖南、棄其妻弗顧、士論不齒」と。光化三年は西暦九〇〇年。

(9) 同右。『劇談録』ならびに著者康駢については、李劍国『唐五代志怪傳奇叙録』(一九九三年、天津、南開大学出版社)に考証がある。それによれば、康駢は正しくは康駢に作るべきで、乾符五年(西暦八七八年)の登進士第と。

(10) 同右。なお李劍国前掲書の考証によれば、張誦の生卒年は八三四年〜八八六年(?)。

(11) 国学基本叢書『韓昌黎集』卷十二

(12) また(1)の「早熟」、(2)の「輕薄」「傲慢」など、文学者に対する類型的な認識パターンが、話柄形成にあたって機能していることが認められる。「早熟」については、『世説新語』『夙慧』や、くだって『太平広記』一七四〜一七五「幼敏」に、また「輕薄」「傲慢」については、『太平広記』二六五〜二六六「輕薄」に、それぞれの項目を内容とする話柄が集められている。

(13) 陸龜蒙「書李賀小伝後」(『四部叢刊』集部『唐甫里先生文集』卷十八)

玉溪生伝、「李賀字長吉。常時日日出遊、從小奚奴、騎距驢、背一古破錦囊、遇有所得、即書投囊中。暮歸、足成其文。予為兒童時、在溧陽聞白頭書佐言、「孟東野、貞元中、以前秀才、家貧、受溧陽尉。溧陽昔為平陵、吳南五里有投金瀨、瀨南八里許道東有故平陵城、周千余步、基址陂陀、裁高三四尺。而草木勢甚盛、率多大櫟、合數夫抱、藜条蒙翳、如塢如洞。地窪下、積水沮洳、深処可活魚鱉輩。大抵幽邃岑寂、氣候古澹可嘉、除里民樵單外無入者。東野得之忘歸、或比日、或間日、乘驢領小吏經幕投金渚一往。至則蔭大櫟、隱叢篠、坐于積水之旁、苦吟到日西而還、爾後袞袞去、曹務多弛廢。令季操下急、不佳東野之為、立白上府、請以假尉代東野、分其俸以給之。東野竟以窮去。吾聞淫畋漁者、謂之暴天物。天物既不可暴、又可抉擿刻削、露其情狀乎。使自萌卵至於槁死、不得隱伏、天能不致罰耶。長吉天、東野窮、玉溪生官不掛朝籍而死、正坐是哉、正坐是哉。」

(14) なお明・郎瑛『七修類稿』卷二十五は、「小伝」の記事は李商隱が「宣室志」によって脚色したものという。小論は基本的に、「小伝」を参照しつつ「宣室志」の話柄が作られたものと考えるが、「小伝」と「宣室志」の記事の何れの成立が早いのかということには、さほど大きな意味を認めない。

(15) 『新唐書』『李賀伝』(一九七五年、北京、中華書局)

李賀字長吉、系出鄭王後。七歲能辭章、韓愈、皇甫湜始聞未信。過其家、使賀賦詩、援筆輒就如素構、自目曰高軒過。二

人大驚、自是有名。為人纖瘦、通眉、長指爪、能疾書。每日日出、騎弱馬、從小奚奴、背古錦囊。遇所得、書投囊中。未始先立題然後為詩、如它人牽合程課者。及暮歸、足成之。非大醉弔喪日、率如此。過亦不甚省。母使婢探囊中、見所書多、即怒曰、「是兒要嘔出心乃已耳」。以父名晉肅。不肯舉進士。愈為作諱弁。然卒亦不就。辭尚奇詭、所得皆驚邁、絕去翰墨畦逕、當時無能效者。樂府數十篇、雲韶諸工皆合之絃管。為協律郎、卒、年二十七。与游者權璩、楊敬之、王恭元、每撰著、時為所取去。賀亦早世、故其詩歌世伝者鮮焉。

浅見洋二、乾源俊、川合康三、西上勝の諸氏より、貴重な教示を得た。記して謝意を表したい。